



## 羅針盤



錦織 千佳子  
Chikako Nishigori

神戸大学大学院医学研究科皮膚科学分野 教授

## 独立独歩，気の向くまま，赴くまま

昨年の晩秋，とある会で原田晋先生から，今度“いつまでも元気な神戸大のシニアたち～”とかなんとかいう特集を組むけど，許可してもらえるか？と尋ねられました。何が何やらわけがわからなかったものの，無論，私が許可するとかしないというものではないし，“神戸の人が元気”と褒めてもらっているのだから悪い話ではないのだろう……と冗談とも本当ともわからないような話を拝聴していました。いよいよその企画がほんものになるらしい，ということで経緯を伺うと，神戸市立医療センター中央市民病院皮膚科の長野 徹先生主催のカンファレンスで講師として塩原先生をお招きした際に，本誌の編集責任者の塩原哲夫先生と原田先生が昔話をしていた折に“神戸の人たちは退職してからもみんなエネルギーに活動しているね……”という話になったらしいのです。関連病院の部長が退職されてからも別の関連病院の“シニアアドバイザー”や“県の参与”という形で若手の指導に携わって下さったり，本を編集されて出版されたり，論文や学会で発表されたりと，各専門分野で依然として活躍されていることを念頭になされた発言とのこと。人生100年時代なので，なにも神戸に限ったことではなく，退職後開業される先生も多いのでこのご時世を反映しているだけの話だと思いますが，そもそも，なぜとりたててそういう話になったかという文脈を探ると，塩原先生の慧眼によれば，「多様な分野で活躍されている神戸大シニアの“エネルギー”の源は，当教室の先代代の教授“個性豊かな”三嶋豊先生に辿り着くのではないかと」と推測されたようです。私は学生の立場としてしか三嶋先生を存じ上げませんが，強者の三嶋先生と丁々発止と対峙するために必然的に神戸大の面々が，それぞれの得意分野で“個性豊かで逞しい強者”になったのかもしれない，という気がいたします。そういうわけで，今回は三嶋先生バリバリの昭和の時代に入局され，三嶋先生の流儀を見て育ててこられた強者たちが出場されます。

三嶋先生は一昨年お亡くなりになって，その際，三嶋先生時代を回顧する機会がありましたが，三嶋先生は回りのことに頓着されず，自分の思い通りに実行されただけに，数々の逸話もあります。その逸話を私に教えて下さった方たち皆さんが例外なく，三嶋先生へのある種の愛着を持って話して下さい

がよくわかりました。三嶋先生の持つておられた“学問への純粹さや研究への情熱”に対する敬意の念があるからに他ならないと思います。一方で三嶋先生もご自身が学問に真摯に取り組んでおられただけに，他者の各専門分野への情熱も尊重しておられました。現在の神戸大のシニア世代の元気さは，三嶋先生のあのバイタリティーを間近に見ながら，それを“標準”として，自分の興味を持つ分野に同様のエネルギーを持って取り組んできたことに由来するのかもしれない。

しかし，よく考えてみると，当時日本はまだ高度経済成長期の名残があり，世の中全体が上昇志向も強く，学会などでも“喧々諤々”の議論はさほど珍しくない時代でした。私自身は神戸大出身ですが，京大に入局させて頂いたので，神戸大の内情はさほどよくわかっていませんでしたが，着任当初神戸大の皮膚科には“学生紛争”時代の名残があるのかなという感触をもちました。それが，ともすると，“アンチ大学”という姿勢になり，一方で，“NO”と言える風土，個々人が割と好き勝手なことをしていても許される土壤があるように感じました。ヒエラルキーを重んじる立場からすると“お行儀が悪い”“まとまりがない”ということになります。この多様性がむしろ神戸大の強みでもあると思っています。私自身が“徒党を組むことを好まず，個を大事にしたい”方で，異質性を許容する社会が健全であり，豊かさの源だと信じているので，この神戸大皮膚科の気風とマッチしたのかと思います。

しかし，これは何も神戸大皮膚科の特徴というよりは，神戸大全体の特徴かもしれません。神戸大の卒業生も2～3割しか大学に残らずに，大半が北は北海道から南は沖縄まで四方八方に散らばっていくことを考えると，大学に根付かずに独立独歩，気の向くまま，赴くまま，というのはそもそも“神戸っ子気質”なのかもしれません。

今の“まるーく，あまーく，柔らかい”ものが好まれている時代を考えると，40～50年前の強烈さもある種の懐かしさを持って思い出しますし，必要な面もあるのかもしれないと思います。本特集号を読んで，昭和時代を思い出しながら活を入れましょう！